

【ポスター発表】

## 障害者との共生に関する大学生の意識研究2

○ 北星学園大学 豊村 和真 (会員番号 0049)

キーワード3つ: 障害、共生、意識

## 1. 研究目的

障害者との共生に関する大学生の意識について豊村ら(2008 ; 2009)で検討をしているが、それらの研究で未解決の問題として、健常者との対比ということとおよび、結果の安定性という点があげられた。すなわち先の2研究を含めて従来の障害者に対する研究においては障害者に対する態度または意識それ自体を調査してもそれが健常者と比較してどうか、という視点に乏しいように思われる。また、1回限りの調査でそれらの結果が再現できるのかという点もあまり考慮されていなかったと思われる。そこで、本報告では、昨年(豊村,2011)に引き続き、これらの2点に対する検討を行う。具体的には、障害者と共生する場合の条件と健常者と共生する場合の条件とを3年間にわたり比較検討を行う。また質問紙を2度同一被験者に実施し、その違いを3年間にわたり比較検討する。

## 2. 研究の視点および方法

## 被験者

2009年度被験者は男女各々16名、52名、2010年度は男女各々13名、53名、2011年度は16名、50名計200名であった。

## 手続き

一回目の調査は全員一斉に行った。その後4グループに分け、1週間後、4週間後、8週間後、11週間後に同じ調査を行った。

調査用紙は、学年性別等のフェイスシートに加え、健常者と障害者それぞれで「あなたの住んでいる地域に、架空人物Aという人が住んでいます。同じ地域で暮らしていく上であなたは以下の内容をどの程度重視しますか？」という問い(対健常者)と、下線部分を「架空人物Bという障害を持った人」に置き換えた(対障害者)教示文があり、質問は、予備調査によって得られた「積極的に社会に参加している」「社会参加」、「理解できない行動をとることがある」「理解不能」、「見た目に良い印象を受ける」「見た目良」、「年齢は子どもである」「年齢低」、「能力が高い」「能力高」、「性格が良い」「性格良」、「人に危害をくわえるようなことはしない」「危害無」の7項目5件法(全く重要でない1～非常に重要である5)であった。

これらの項目の並びは対健常者用と対障害者用で異なっていた。

### 3. 倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会研究倫理指針の「第2指針内容C調査」に従って行なわれた。

### 4. 研究結果

#### 健常者との比較について

1回目で対健常者と対障害者間で比較的差が見られた(0.4以上)のは、「理解不能」「見た目良」「性格良」「危害無」の項目であった。

同様に2回目は「理解不能」「見た目」「性格良」の項目の項目であった。以上の項目はすべて有意水準1%未満で対健常者と対障害者間で有意差が見られ、昨年度の報告と比較してもほぼ同様の結果となったが、「危害無」項目は1回目のみ昨年度は対障害者と対健常者では0.4以上の差があったという点が異なる。

#### 回答の安定性について

次に、被験者ごとに対健常者と対障害者それぞれについて1回目と2回目の回答の差の二乗和をとり、その値を反応の安定性の指標とした。その結果、対健常者の「性格良」と「危害無」は比較的安定していた。同様に対障害者においては「能力高」と「危害無」が安定していた。安定していなかった項目は、対健常者においては「見た目」、対障害者においては「理解不能」と「見た目」「年齢低」であった。

#### 期間別回答期間の影響について

対健常者と対障害者別に各7項目の二乗和を被験者ごとに計算した値を、期間別(1週、4週、8週、11週)に平均を求めた。対健常者、対障害者とも期間が広がるにつれて判断がずれてくる傾向が見られた。有意差はみられないものの対障害者のほうが差が大きくなる結果であった。

### 5. 考察

#### 健常者との比較について

有意な項目についてはいずれも対健常者が対障害者を上回る(=重視する)結果が得られた。すなわち全体としては、隣人として暮らす場合には、障害者と健常者ではほぼ同じか、障害者のほうがやや許容度が高いという結果が得られた。

#### 回答の安定性について

対健常者と対障害者間で有意差(1%未満)が見られたのは、「性格良」、「危害無」の2項目であった。おおむね5件法で1段階程度はゆらぐことが示された。